

2020 年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書 提出日 2023 年 7 月 20 日		
氏名: 赤穂 沙織	実施国: マダガスカル	調査研究
活動名称	マダガスカル中央高地 農村生活実態調査	
実施期間	2021 年 2 月 1 日 ~ 2023 年 3 月 31 日	
(1) 申請した動機		
<p>JICA 青年海外協力隊任期の最後に、後輩隊員に引き継ぐ材料として調査を行うことを考えていたが、世界的な新型コロナウイルス感染拡大による緊急帰国のため叶わなかった。せつかく現地語を習得し、現地の方々とのネットワークを得たからこそ、この調査を行う意味が大いにあると考えた。また、ボランティアの再派遣やプロジェクトの再始動に先駆け、自らも微力ではあるが役に立てれば、と考え、生活上の課題を発見し、自身の任期中の活動内容であった「生活改善」の視点から、考察したいと考えた。</p> <p>さらに、本調査を活用し、日本の児童・学生にマダガスカルの生活を伝える素材を作成できたらと考え、申請した。</p>		
(2) 活動内容概要		
<p>①農村調査</p> <p>ア 当初の計画</p> <p>申請時には 2020 年 11 月～12 月の 1 か月間を調査期間とし、マダガスカルに渡航して農家を周って調査をする予定であったが、想像以上にコロナウイルスの収束の目途が立たず、計画していた時期に渡航が叶わなかったため計画を変更せざるを得なくなった。実際の活動は以下の通りである。</p> <p>イ 実施概要(実際の活動)</p> <p>i) リモート調査(2021 年 2 月～5 月)</p> <p>上記の理由から渡航を延期せざるを得なくなったため、現地の農業・環境系 NGO の職員に依頼をし、現地調査に行く前に事前にリモートで調査を行うこととした。</p> <p>調査方法</p> <p>2 つの村において 50 軒ずつを対象とした。こちらで事前にアンケート用紙を作成し、現地の方に内容を説明したうえで調査を依頼し、調査結果をメールやビデオ通話を通して定期的に報告してもらった。</p> <p>ii) 調査結果の共有(2021 年 4 月、9 月)</p> <p>「協力隊まつり」で調査途中の報告を行った。また、同 21 年 9 月には渡航ができたかと考えていたが、一般渡航による制限は変わらないままであった。この時期からマダガスカルも JICA 海外ボランティアの派遣が再開したり JICA 技術協力プロジェクトが再始動となったため、自身の後任を務めるボランティアの方に引継ぎも兼ねてリモート調査結果の共有と報告を行った。</p> <p>iii) 現地調査(2022 年 9 月)</p> <p>コロナウイルス感染拡大の影響による渡航制限や入国制限が緩和され、自身の職場との調整がつき、やっと現地調査へ行けることとなった。元マダガスカル隊員で現役教員の友人たちに、「マダガスカ</p>		

ルの人に聞いてみたいこと」「マダガスカルについて知ってみたいこと」についてクラスの生徒等から質問を募ってもらい、現地調査に備えた。

調査方法

リモート調査で協力をもらった住民数軒を訪ね、日本の学生にマダガスカルの生活を伝える素材に使うための動画や写真の撮影を行った。

②日本の児童・学生向けの活動

ア 当初の計画

申請時には自身の職場で行うつもりであったが、渡航を何度も延期している中で2021年4月より学校現場から離れることになったため JICA 関係で知り合った現役教員の方々にも協力をお願いできるよう調整をした。しかしながら、現地でのインタビュー素材等がないとなかなか話を進められないため、大幅なスケジュール変更を余儀なくされた。実際の活動は以下の通りである。

イ 実施概要(実際の活動)

i) 職場での活動(2021年3月 中学校4クラス)

まだリモート調査を始めたばかりのところであったため、自身が現地で活動していた際に撮った動画や写真等を使いながら、リモート調査で見えてきた現地の生活を織り交ぜながら話をした。

ii) 現役教員の方々による活動(2023年3月 小学校2クラス)

前述のとおり現地調査前に「マダガスカルの人に聞いてみたいこと」「マダガスカルについて知ってみたいこと」について子どもたちに質問を募ってもらい、それに基づきインタビューしたものを字幕付きの動画にして活用してもらった。

iii) 学童クラブでの活動(2023年3月 小学生20名及びその親御さん)

日本にいる知り合いのマダガスカル人にも協力をしてもらい、学童クラブで講演を行った。調査で作成した動画や写真を活用しながら、マダガスカルでの生活についてクイズを交えながら子どもたちに伝えた。

(3) 活動の成果・苦労した点・反省点等

①農村調査

リモート調査では、当初の計画(自身による現地調査のみ)を変更し、NGOに勤める現地関係者に調査を依頼した。結果的に調査される側である農民の方々の生の声が聞けると実感し、実態に近い回答をもらえたと考えるため、当初よりもよりよい調査を行えたと感じている。ただ、現地の方2人にそれぞれの地域での調査を依頼したため、質問の意図にずれがあり、修正が必要となることがあった点が苦労した。

反省点としてはリモート調査から現地調査までの間が空いてしまったため、リモート調査は後輩への引き継ぎが主で、現地調査は開発教育向けの素材づくりが主と、当初想像していたよりもその二つが切り離された調査となってしまった点である。渡航制限という制約はあったにせよ、もう少し何かつなぎの活動を考えられたら良かったとも思う。

②日本の児童・学生向けの活動

現地の子どもへのインタビュー動画を日本の児童に見せたときには、洋服や周りの家など、様々なことに気づききっかけを与えることができた。また、少し難しいかと考えていた①の調査結果のグラフ等も、現役教員の友人に活用してもらったところ、収入額や洗濯の頻度などに対する生徒たちの反応も良く、小学校高学年以上になると動画や写真だけでなく数値的に見せるということも効果的であると感じた。

苦労した点と反省点としては、インタビューの取り方で、1問1答形式で行ってしまったが、後で文字起こし翻訳するという作業が想像以上に手間取ってしまったという点と、子どもも緊張してしまい上手く答えを引き出すことが出来なかったという点が挙げられる。もう少し自然体(学校で遊んでいたり普段家事を手伝っている様子等)など、ある程度動作を含む動画にしたほうが、子どもも普段通りでふるまうことができ、日本でその動画を見る児童にもより興味を持ってもらえたのではと思う。

(4) 今後のプラン

今回の調査で得た知識及び経験を活かし、将来的には修士号の取得を目指したいと考えている。また、プロジェクトとしての期間は終了としているが、日本の児童、学生向けの活動に関しても調査で得た素材を活用し、引き続き続けていきたいと考えている。今後講師の依頼等も積極的に引き受け、今回の経験を最大限に活かし続けていきたい。